

非言語コミュニケーションを重視した 医学部臨床実習の試み

山本 健太、金西 賢治

香川大学医学部母子科学講座周産期学婦人科学

1. 背景・目的

医療現場において、医師と患者のコミュニケーションは診療において重要な要素である。特に患者が不安を抱えている場合、それに気づいたうえで対応することは、患者の安心感や信頼を高めるきっかけともなりうる。このコミュニケーションには、言語的なやり取りに加えて、表情や姿勢、ジェスチャーなどの非言語的要素も含まれる。非言語的コミュニケーションは、言葉では表現しづらい患者の感情や心の状態を読み取る上で重要な手がかりとなる。

特に産婦人科においては、妊娠や出産、女性特有の問題など患者の心理的な負担が大きい場面に遭遇することも多い。このような状況において、医師が非言語的サインを正しく理解し、患者の気持ちに寄り添うことは、治療効果を高め、信頼関係を築くために欠かせないものである。しかしながら、従来の医学教育では、非言語的コミュニケーションに対する意識が十分に高められていない傾向がある。医療者がどのようにして非言語要素に意識して振る舞うかということはしばしば教科書でも言及されているが、患者の表情やジェスチャーを読み取り、どのように対応していくかを考える機会はほとんどない。このため、実際の診療現場で患者との信頼関係を構築する際に、非言語的コミュニケーションの不足が障害となることがある。それに加えて、SNSの普及や新型コロナウイルス感染症による対面コミュニケーションの減少も、医学生のコミュニケーション能力に影響を及ぼしていると考えている。

そこで今回我々は、医学生が患者と接する臨床実習の場において、非言語コミュニケーションに着目する取り組みを行った。SNSの普及に加えて、新型コロナウイルスなどの影響により対面コミュニケーションの機会が減っている中で、医学生と患者コミュニケーションを円滑にすすめるこ

とを目標とした。本研究では、その取り組みに対する実習終了後のアンケートを質的に分析し、医学生の実習で非言語的コミュニケーションに着目することの効果について検討したので報告する。

2. 方法

本研究は、産婦人科臨床実習に参加した医学生を対象に無記名で授業評価アンケートを実施した。

各グループ5-6名で構成されており、2週間の産婦人科実習を行う。実習初日に「患者さんから話をきく」ためには、具体的に何をすればよいかグループディスカッションを行う。ディスカッションでは、一般的な礼儀や言葉遣い、身なりや服装、事前の情報収集などに加えて、非言語的コミュニケーションが患者との信頼関係構築にどのような影響を与えるか、実際の診療場面でのどのようにそのスキルを活用すべきかについて議論するように促した。これまでの学生生活やアルバイトなどで経験した非言語的サインの重要性についても共有し、患者との対話に生かせることがないか学生同士で話し合う。その後、事前の情報収集をした後、病棟での入院患者に対する医療面接を5-6回/2週実施する。医療面接を行った際には、その時観察できた非言語的コミュニケーションとそれに対する学生の評価をカルテに医療情報とともに記録するように指導した。

実習終了後に、非言語的コミュニケーションに関する自由記述形式の項目を含む実習評価アンケートを配布した。これらの自由記述データを質的分析の手法により解析した。

3. 結果

質的分析の結果、以下の5つの項目が挙げられた。

- ・患者への意識の向上

多くの学生が、非言語的コミュニケーションを通じて、患者の表情や姿勢、視線などに気付く能力が向上したと感じた。特に、産婦人科では妊娠や出産に伴う患者の心理的負担を非言語的なサインから察知し、適切な対応を行うことの重要性について記載があった。学生たちは、言葉だけではなく、患者の感情や心の状態を理解するためには、非言語的な要素に敏感である必要があると実感した。

- ・実習全体へのポジティブな評価

学生たちは、非言語的コミュニケーションに関する学びが非常に有益であったと評価し、実習全体に対してもポジティブな意見が多かった。特に「患者との信頼関係を築くために役立った」「将来の診療に活かせる重要なスキルを学んだ」といった声が多く寄せられた。学生たちは、この実習が従来の実習とは異なる、より患者中心のアプローチを学べた場であったと評価している。

- ・非言語的コミュニケーションに初めて注目

他の診療科の実習ではあまり触れることのなかった非言語的コミュニケーションに初めて注目する機会となったとする声が多くあった。「他の診療科では、非言語的コミュニケーションが教えられることは少なかったが、産婦人科では特に重要だと感じた」との意見が見られた。特に、産婦人科の診療では、非言語的なサインを読み取る能力が他の診療科に比べて求められると学生は認識していた。

- ・感覚を言語化する経験

実習中に患者の非言語的なサインを観察し、それをカルテに記載するという経験が学生にとって大きな学びとなった。これにより、感覚的な情報を言語化するスキルが向上し、他の医療スタッフと情報を共有する際にも役立つスキルとして認識された。

- ・理解や評価に対する課題

一部の学生は、非言語的コミュニケーションの評価方法に困難を感じていた。具体的には、患者

の表情や態度をどのように診療所見として評価するか、またその情報をどのようにカルテに反映させるかについて不明瞭であったと述べている。実習が短期間であったことが一因であるとの意見もあった。

4. 考察

産婦人科実習における非言語的コミュニケーションの着目は、多くの学生に対して重要な学びを提供した。特に、患者の表情や姿勢といった非言語的サインを読み取る能力は、患者の心理状態を理解し、診療に役立てるために必要不可欠なスキルであることが明確となった。学生たちはこの実習を通じて、患者中心の医療における非言語的要素の重要性を再認識し、今後の診療に活かす意欲を示していた。

一方で、非言語的コミュニケーションの評価方法やその習得にはさらなる工夫が必要であることも明らかになった。特に、実習期間が短い中での教育では、十分な理解に至らなかった学生が一部存在しており、今後はフィードバックの強化や長期的な研修の中でこのスキルを磨く機会を提供することが求められる。また、非言語的コミュニケーションを評価する際の具体的な指標やガイドラインを明確にすることで、学生たちがより実践的な学びを得られるようにすることが必要である。

5. 結語

本研究では、医学生の臨床実習において、患者の非言語的コミュニケーションの観察に注目することが、医学生の学びに大きな影響を与える可能性が示唆された。一方で、非言語的コミュニケーションの評価方法に関する課題も浮き彫りとなり、今後の教育手法の改善が求められる。適切なフィードバックを模索し、継続的な実習機会を提供することで、学生が非言語的コミュニケーションスキルをより効果的に習得できるようにすることが重要である。